

バイリンガル・マルチリンガル (BM) 子どもネット第1回学習会 報告 2

Report 2 Bilingual/Multilingual Child Network (BMCN) First Annual Meeting, 2016

2016年8月10日に国際基督教大学ダイアログハウスにおいて「BM子どもネット第1回学習会」が行われた。この文書(報告2)は学習会のプログラム第二部「ワーキンググループによる話し合い」のまとめである。

第二部 6つのワーキンググループ (WG) による話し合い

- WG 1 【広報・啓蒙活動】
- WG 2 【質問紙・ガイドライン】
- WG 3 【行政機関との連携】
- WG 4-1 【幼児期】
- WG 4-2 【小学校】
- WG 4-3 【中高生】

WG 1 【広報・啓蒙活動】

■現状：①日本語が上手ではないが、子どもには日本語で接しなくてはいけないと思いきみ、コミュニケーションが円滑でない親子がいる。

②母語の発達・保持を支えるには保護者の理解と協力が不可欠⇒啓蒙の必要性高いが、なかなか伝わらない。社会全体に知識が不足している。あやまった言説が流布している(2言語を習得させようとするとう日本語の習得にマイナスになる)。

③母語・日本語の両言語とも弱いとわかっていても、どうしたらよいか分からない保護者が多い。

■啓蒙活動の趣旨・方針：医療分野では、人々の健康・生命にかかわる医療保険情報が非情に早く社会に浸透する。医師会、厚労省がどこかでつながり、中心になってすすめるシステムができているのではないか。例) インフルエンザの予防とうがい、携帯電話の電磁波など。そのストラテジーを参考に「母語は健全なアイデンティティ形成、認知の発達に必要である」ことを精神医学・医療分野の問題として啓蒙活動してはどうか。

■対象：①保護者 ②幼稚園教諭・保育士 ③学校教員 ④教育委員会

■形態：①小冊子(パンフレット) ②リーフレット ③A5 サイズ、B6 サイズぐらいの大きさのカード(詳細を調べる参照先は明記) ④フェイスブックなどもあってもよいが中心にはしない。 ⑤母子手帳にも記載

■パンフレット・冊子等の内容

➤ キーワード：「子どもの情緒のため」「健全なアイデンティティ形成のため」「親子のき

づなである母語を大切にしてください」

- 対象：①親むけ ②幼稚園・保育園など
 - 協力依頼：医療、教育、政治のそれぞれの分野で信頼されている、権威のある先生方から力添えを仰ぐ。また文化庁、厚労省に協力を求める。
 - 配付：クリニック、大使館、コミュニティーセンターなど
 - 記事内容のアイデア：母語を継承した成功例を載せる。（どうしてよいかわからない親御さんのため）
- 課題：資金を確保する必要がある。

(書記^{もりこね}小根) <リーダー鈴木・真嶋>

WG2 【質問紙・ガイドライン】

1. メンバー (7名)：啓明学園の先生方 (現役・OG) 4名、臨床心理士 (多言語・多文化対応)、日本語指導ボランティア・主任児童委員、市教委コーディネーター

2. 討議内容

2.1 現場の声

- ・ 日本語指導ボランティアとして教委から委嘱を受け、小中学校に転入する子どもたちの背景について聞き取りをしたり、日本語のレベルチェックをしたりして学校につながる役割を担っている。学校の先生方が多言語・多文化を背景に持つ子どもたちが抱える発達や学びの困り感 (違和感) に気づくことが難しく学校との連携に悩むことがある。
- ・ 以前は学級担任として、現在は国際教室担当として子どもたちに関わっている。立場が変わると子どもについての見方が変わる。どのような立場にあっても子どもたちの課題に気づけるチェックリストがあると良い。
- ・ 現場の教員が多言語多文化を背景に持つ子どもたちの発達障害に気づけるような学習面、行動面のチェックリストがあると、時間を失うことなくそれぞれの子どもたちの教育的ニーズに合った指導や支援につなげることができる。
- ・ 学校や保護者が子どもの言語習得や発達について「違和感」を感じた時、どこに相談しどのような手順で本人に合った指導や支援につなげるか、また家庭や学校でどのように子どもを支えていくか、分かりやすく示されたガイドラインがほしい。
- ・ 外国人保護者は自分の子どもが発達上の課題を持っていてもそれに気づきにくい。発達障害や特別支援教育についても正確な情報を得られず、発達障害があると診断を受けても、その後、家庭でどのように子どもに関わったらよいか理解してもらるのが難しい、
- ・ 発達障害の診断を受けた子どもを持つ外国人保護者のための「これだけは」的なガイド

ブックがほしい。

2.2 ガイドラインの内容

- ・ 多言語・多文化を背景に持つ子どもたちのための学習面、行動面のチェックリスト
- ・ 子どものことばと行動の実態把握＝言語習得の課題＋発達の課題の両面から把握できるチェック項目（言葉の問題か発達の問題か双方向で見立てを誤るケースがあるので）
- ・ 学校・保護者向けに支援の流れが分かるフローチャート
- ・ 外国人保護者向け発達障害ガイドブック
 - 発達障害についての理解
 - 利用できる社会的資源情報
 - 相談機関（療育相談・教育相談・多言語相談）
 - 多言語で対応する医療機関
 - 特別支援教育（特別支援教室・特別支援学校・療育手帳・就労支援）
 - 子どもの特性に合った家庭での関わり方
- ・ 学校、支援者向け啓発資料（多言語・多文化を背景にもち発達障害をあわせもつ子ども達への指導と支援の方策について）

2.3 転入時の聞き取り／質問票について

- ・ 学校としては受け入れ時に家庭環境、子どもの発達について気がかりなことがあれば子どもの全体像を把握しておきたい。家庭環境、来日前の発達面や学習面で課題が分かれば、早急に対応を考えることができる。
- ・ 性的虐待や DV などデリケートな内容については保護者との信頼関係がないと話してもらえない。保護者との信頼関係構築が前提。
- ・ 担任をしていて2年目にやっと母親が子どもについて心配な点をカミングアウトしてくれたことがあった。
- ・ 「いやなことは話さなくていいんです」「差し支えないことだけお話しください。」と前置きして聞き取りを始める。
- ・ 通訳への信頼感から初対面にも関わらずプライベートなことを話してくれることもある。（結婚歴、離婚歴、子どもの育てにくさなど）
- ・ 保護者自身が子どもの育ちや学びについて気がかりなことがあり、医療機関（心療内科・精神科）で医師やケースワーカー、臨床心理士の質問に答える時と学校への転入時の面談や担任との面談ではどこまで事実を伝えるか親の気持ちが異なると思う。
- ・ 臨床心理士の立場からは、幼少時から母親が気がかりだったこと、音に敏感、こだわり、発語、発話、ジャーゴンがあったか コミュニケーションや人とのかかわり方につ

いて知りたい。軽度発達障害の子は言語面だけでなく行動面からも把握することができるので成育歴のなかでの子どもの特徴的なエピソードがあれば聞いておきたい。

2.4 聞き取りは二段構えで

第一段階 転入時の聞き取り：子どものこれまでと現在について把握する。

参考) 啓明学園の言語環境調査票 (何語のテレビを見る? 何語の本を読む?)

特別の教育課程の個票のフォーム

質問票に含めたい項目

- ・ 移動の記録 (出生～現在)
- ・ 学習歴・教育歴
- ・ 親と離れていた時期があるか
- ・ 誰と暮らしていたか
- ・ 家庭での言語使用 (誰と何語で話すか)
- ・ 性格や行動面の特徴

第二段階 教員や支援者、保護者が子どもの発達や学習状況に違和感を覚えた時、発達障害の見立てにつながる質問票を使って情報を集め、課題を整理する。

- ・ 保護者が子どもの課題に気づいていないと質問票に記入してもらう形では問題が見えない。
- ・ 質問票に沿って教員や相談員が保護者と対話する形式をとると保護者は子どもの成長過程を振り返り、その中で記憶に残るエピソードを思い出して語ってくれることがあり、子どもの発達のでこぼこや特性が見えてくる。
- ・ 特別支援教育のチェックリストを援用⇒言語と文化的影響が考えられる項目と言語や文化的影響が少ない項目を分けて課題を整理する。

★ 発達障害と診断が出ると学校では特別支援学級に転籍し、必要な日本語指導が打ち切られることが多いが、そうなるとする子どもたちの教育的支援ニーズが十分満たされない。この点について教育現場に問題提起し、状況を改善していく必要がある。

3. 参考資料

(注) 次の1番目と3番目は平塚による補記。

(1) Collier, C. 2011. “Seven steps to Separating Difference from Disability”

(2) “Screening, interventions and prereferral procedures for LEP students.”

https://www.asdk12.org/depts/ell/SpEd/SpEd_ProcedureManual.pdf#search='screening%2C+interventions+and+prereferral+procedures

(3) 上野一彦監修 (2007) 『特別支援教育の理論と実践 I—概論・アセスメント』

(文責 平塚) <リーダー 島田>

WG3 【行政機関との連携】

参加者数：14名

0. 簡単な自己紹介

1. 参加者が関わりを持つ神奈川県座間市・川崎市・横浜市、千葉県千葉市、群馬県勢崎市・大泉町、大阪府豊中市の行政機関の対応などについて情報交換。次のような声があった。

- ・行政に働きかけてもうるさがられてしまったり、アプローチが難しい（どうしていいかわからない）
- ・母語（少数民族のことば）＋母国語＋日本語の三言語の間で大変な思いをしている子どもや、学校の担任の先生が変わり認識と対応に変更があったおかげでうまくいっている子どもなど、さまざまなケースがある

2. 行政機関に期待する役割

各行政機関は、その地域に住民登録がある人々について、どこに、どんな人が、どれくらいいるかという情報が把握できているところ（であるはず）

↓

現状として、各行政機関は

- ・外国につながる人々の状況をどれくらい把握できているか **実態把握**
- ・外国につながる人々が生活していくために、また子どもを育てるために必要で有益な情報を、どのように伝えているのか？多言語で伝えているのか？一人一人にきちんと伝えられているのか？ **情報提供**

↓

自治体によって、状況はさまざまな様子。その辺りが整備されることを期待したい。

外国につながる人々への窓口になる存在として、大変重要な役割がある。

3. **子どもの年齢に応じて「乳幼児(ママ)」「小学校低学年」「小学校高学年」の3グループに分かれて、さらに議論を進めた。**

<まとめ>アメリカミシガン州をはじめ海外行政機関では、海外（日本など）から移住してきた子ども達も「グローバル人材」として国の宝だという捉え方をしている。日本の文科省もそうした姿勢を打ち出してきており、今後の対応に期待したい。

また、保護者自身が自ら母語保持サポートを学校に働きかけたり、活動をしたりしているケースも多い。この辺りも併せて考えていきたい。

(文責 嶽肩) (リーダー 石井・桶谷)

WG4-1 【幼児期】

■日本生まれだが、家庭内、コミュニティ内でのみ生活。日本語0の状態の児童

↓

【学校】入学後、日本語ができない、集団行動が出来ないという理由からグレーゾーンと判定

【保護者】「日本語ができないだけ」と主張

★就学時検診がチャンス！プレスクールや幼稚園や保育園についての情報を伝える。

■幼児への母語指導、保護者への啓蒙の良い方法

【絵本・読み聞かせ】

① 本を使った指導

司書の先生と協力して、その児童が読めそうな本をピックアップし、赤いシールを貼ってもらった。「一人で読めた」という経験を積ませることが大切。

② 集団指導

読み聞かせに親子で参加してもらおう。親が子どもに読み聞かせをするのではなく、母語や日本語で親子に読み聞かせをする。そうすることで、親子で楽しむ事ができる。

(例)読み聞かせの本：エリック・カール “お友達になって”

③ 母語での読み聞かせ

母語で読み聞かせをして、その後、自己紹介をしながら、その本の感想を一言言ってもらおう。

また、読み聞かせた後は、感想を書くという習慣を付ける。まだ、文字が書けない児童に関しては、◎、○、×などでもいいので書かせる。

④ 国際教室から本の貸し出しをする。貸し借りの方法を教える。感想文は、家族と一緒にやっという宿題だと話す。家庭内で読み聞かせの習慣がいたら、市の図書館を勧める。

【その他】

⑤ ブックスタートを各言語で作成する。

⑥ 小学校に入学した際、母語がしっかり話せない児童の保護者に母語の大切さを伝えても、なかなかやり方が分からなかったり内容の濃い会話が出来なかったりするので、1歳児検診や3歳児検診で母語の大切さについて啓蒙する冊子を渡す。

⑦ 乳幼児に対する市主催の講座などに通訳をつける。通訳が来る日を事前に外国人保護者にお知らせする。

⑧ 実際にバイリンガル子育てをした保護者の話を聞く機会をもうける。

■**検診で発達に疑いがあると言われた子どもが増えている。機能的な問題なのか？言葉の問題なのか？**

- 判断が難しいので、様々な目で考えていく必要がある。

- 3歳児検診で保護者が「発達に不安がある」と相談しても、「2言語で育てているから

仕方がないのではないですか」と言われ、相談できるところがなくなってしまうケースがあった。

→検診時の対応に関しても、啓蒙していく必要がある。

- 地域の人ともっと関わっていくことで、日本人の家庭ならどうということをするのか、
- 同年代の子どもがどんな行動をするのか自然と伝わるはず。

(文責 金箱)〈リーダー 高橋〉

WG 4-2 【小学校】

教師が教えている子どもに関する悩みや問題について話し合われた。参加者は横浜、愛知、大阪、スペイン、スイス、アメリカ、台湾など、国内外の学校や地域で実際に支援に携わっている人たちで、目の前にいる子どもたちの言語発達における悩みや問題、またその支援方法について事例の共有が行われた。例として、「家庭言語が現地語と英語、学校では日本語の環境にいる小学1年生児童で、日本語がなかなか覚えられず、文字と音が結びつかないケース」や「海外の国際結婚家庭児で4言語を学習しているがどれも不十分で、補習校もやめてしまったケース」などが出された。後者について参加者から「進級制度のある補習授業校の問題」、「保護者の理解が不十分である」というような指摘があり、これに対してグループに参加した専門家から「言語を1つに絞ったら、必ずしも問題が解決するわけではない」、「家庭と学校が協力して、ことばへの接触量が一番増える方法を考えるとよい」などというアドバイスがあった。それをサポートするような事例として、「低学年時に母語のスペイン語と学校言語の日本語の両方が不十分であったが、保護者と日本語担当教員とが連携して、それぞれの言語での語りかけや読み聞かせなどを徹底して行ったことにより、1年後に2言語ともかなりの伸びが見られたケース」などが、実際の音声発話の文字化データとともに示された。

(書記 伊藤)〈リーダー 中島・櫻井〉

WG 4-3 【中高生】

参加者 18名

- ・言語発達においては幼児期のケアが大切なようだが、中高生の時期にリミテッド状況にある場合は「手遅れ」なのか。どのような対応方法があるのか。
- ・大阪の事例では、高校入試のハードルが低く、入ってからのケアもある。「まず入れる。しっかりサポートする。」というのが鉄則。必要なサポートを洗い出すための査定が行われる。JSLのほかに母語保持も。母語が未発達の子も見られる。学生ボランティアもサポートに参加。1名は中国ルーツのBLで非常に優秀。

- ・ 愛知の事例では高校の支援は定時制で。
- ・ カルフォルニアでの事例
- ・ 浜松の事例でも高校の支援は定時制で。生徒自身のモチベーションも低く、教室ではお客さんでいいと思っている様子。日本語が足りないのはわかるが、母語ではどうなのか、測る方法がない。
- ・ 啓明学園の事例では、中一の段階でのリミテッド（パラグラフの意味がとれない等）は5,6年かけて指導（言語的な支援 + その他の活動などの刺激）すれば追いつく。高校一二年生段階では追いつくのは無理だが、履歴書が書けて面接の受け答えができるレベルまでは持っていける。社会生活を送るにはそれで足りる。経験から、声変わりするまでに預かれれば大学に入れられる。
- ・ DLA の調査で小学校を回らせていただいた時、日本語と母語の語彙を合わせればそんなに低いとはいえない子について、日本語の低さから「学習障害ではないか」と見ている担任の先生がいた。すぐに障害を疑うのではなく、両言語で子どもの力を見てほしい。
- ・ 専門家の立場からは、WISC（知能テスト）で「認知・パフォーマンス・ワーキングメモリ・処理速度」などの項目を調べて、どこが欠けているかを見つけて必要なケアを洗い出す。ワーキングメモリが低い場合はケアしても効果が上がらないことが分かっている。
- ・ 身近に専門家がない場合、どうやって測定したらいいのか分からない。
- ・ 小学校～中学校1年生レベルまではDLA（対話型アセスメント）が使えるが、中学三年生から高校生向けのアセスは未開発。←早く作ってほしい。
- ・ スケールが未発達であること、医療と教育の連携がないことが問題の焦点であるようだ。

（文責 菅長）〈リーダー山下〉